

# ウィーンおよびウィーンの著名人における 観光資源としての顕彰・展示にかんする一考察

阿 部 勘 一

## 1 はじめに

本稿は、ウィーンおよびウィーンにおける著名な人々をめぐる2つのトピックについて問題提起することを主たるテーマとする。まず、ウィーンにゆかりのある著名な芸術家や学者などが輩出される背景に、ウィーンあるいはオーストリアの地理的、歴史的背景がどのように、どの程度関わっているのか、各分野において言及されている点を相互に関連付けながら考察することの可能性について仮説的に述べることにする。次に、もう一つのトピックとして、ウィーンにおける歴史的、文化的資源の展示について考察する。特に音楽などの目に見えない文化的資源を展示し観光資源とすることについて、ウィーンにゆかりのある著名人を顕彰する施設などの現状を紹介しながら、文化的資源を観光資源とすることについて考察するための布石を提示するとともに、このトピックを考察する必要性について問題提起をおこなう。

## 2 ウィーンに台頭した著名な市民たちとその背景

ウィーンを首都とするオーストリアという国は、周囲の地域に存在する様々な民族からなる国である。オーストリアは、神聖ローマ帝国の皇帝として君臨したハプスブルク家によって支配されていたが、その領土は、現

在のオーストリアをはるかに超えるものであった。その広さは、「北はチェコからドイツにかけての一带、東はドナウ側の下流域と黒海、西はスイスの山々、南はイタリア、地中海にいたるまで」(小宮 2000: 15)であったという。このように見ると、ハプスブルク家が支配し影響力を及ぼしていた領域は、単に広大であるだけでなく、地域的、民族的な多様性があることがわかる。現在のチェコとイタリアを比較すると、気候や地理的特性、そして住まう人や民族の特性が大きく異なっていることは容易に想像できる。そのような異なる特性のある地域が一つの「帝国」として存在していたのである。ウィーンは、このような広大な領域を支配していたハプスブルク家のお膝元にある都市であることから、ウィーンには多様な出自の人々が周辺地域から集まることとなった。

さらに、歴史的な経緯もまた、ウィーンという都市に芸術や文化をもたらしたといえる。たとえば、ウィーンが「音楽の都」となった要因の一つに、音楽家たちがハプスブルク家の宮廷の楽士として活躍する場の存在がある。宮廷の中で培われた音楽文化は、その後ウィーンの市中にも拡散することとなった。18世紀末から19世紀にかけて、ヨーロッパではフランス革命をはじめとする市民革命が起きていた。市民は統治していた国王を引きずり下ろそうとしていたのだが、一方で、市民は敵である国王のために建設されたオペラ劇場を大切に扱い、「改革の合間をぬって、この劇場でオペラを鑑賞し、おいおいに満足したと伝えられている」(小宮 2001: 18)という。市民は、特権階級である国王と同じような楽しみを味わおうとしたのであり、その一つがオペラ鑑賞だったのである。このようにして、国王や貴族の特権であったオペラ鑑賞は、市民の間に広がっていくこととなったのである。オペラが特権階級から解放されることによって、宮廷に仕えていた作曲家は、国王に付度したような題材や内容ではなく自分の思うままに作品を生み出すことができるようになった。このような時代背景の中で、ウィーンでも市中において音楽の文化が発展し、ウィーンはまさに

「音楽の都」となったのである。

さらに、ウィーンの場合、音楽文化が花開いたのには、市民に対するオペラの解放だけでなく、「民衆音楽もまた、ウィーンへと放浪してきた楽士のおかげで繁栄をとげてきた」（小宮 2000: 25）というように、民衆の間から広がった面もある。小宮正安によれば、現在一般的にウィンナーワルツと呼ばれるウィーンで流行したアップテンポのワルツは、オーストリアの田舎で生まれた様々な農民の踊りが結びついて成立してきたという（小宮 2000: 27-28）。ウィーンの中では、ワルツに合わせて「ひしひしと抱き合った男女が、あられもない姿で踊り狂」（小宮 2000: 28）ったという。このように、ウィーン音楽文化を象徴するワルツは、現代にたとえるなら、クラブやディスコで、あるいはストリートで繰り広げられるダンスのための音楽であり、まさに庶民の流行音楽であった<sup>1)</sup>。ウィーンを席卷した（ウィンナー）ワルツは、現在では音楽の街ウィーン象徴として世界的に認識されている。ウィーンが音楽の街となったのには、多様な周辺の地域から多様な出自を持った人々が集うという地理的な背景、さらに19世紀以降、市民や民衆の力が台頭する中、いわば「下から」音楽文化が培われてきたという歴史的な背景があることを念頭に置かなければならない。

このようなウィーンあるいはオーストリアという国の地理的、歴史的特徴は、音楽以外の文化、芸術にも少なからず関係しているといえる。特に、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのウィーンは「世紀末ウィーン」などと呼称され、その歴史的意義について論じられたものが多数ある。この「世紀末ウィーン」では、音楽以外にも、文学や美術そして学術の分野に至るまで、多くの著名な人々が登場し活躍していた。

美術では、19世紀末から20世紀前半にかけて活躍したグスタフ・クリムトが有名である。クリムトもまた、古典的、伝統的なものを重んじるいわゆる保守的なものから分離し、新しい表現を目指した「ウィーン分離派」を創始するなど、市民たちが台頭し多様な文化を受け入れる環境があ

った19世紀末のウィーンを象徴する存在だといえる。そして、作家では、『チャンドス卿の手紙』で有名なフーゴ・フォン・ホーフマンスタールが有名である。

学術の分野では、ウィーン大学を中心に、歴史に名を残す学者達が数多く台頭していた。ウィーン大学で学んだ学者には、カール・ポパー（哲学）やジークムント・フロイト（心理学）、アルフレッド・アドラー（心理学）、クルト・ゲーテル（数学・論理学）、グレゴール・メンデル（植物学）、クリスティアン・ドップラー（物理学）などがある。そして、これらの学者の中には、ウィーン大学で教鞭をとった者もいる。また、ウィーンあるいはウィーン大学の出身ではないが、マックス・ヴェーバー（社会学）もウィーン大学で教鞭を執っていた時期がある。

経済学の分野では、後にオーストリア学派と呼ばれるほど、経済学史上著名な経済学者がウィーン大学で学び、そして教鞭をとっていた。オーストリア学派の端緒といえるカール・メンガーを筆頭に、フリードリッヒ・ヴィーザー、オイゲン・フォン・バウム＝バヴェルク、そしてヨーゼフ・アロイス・シュンペーター、ルードウィッヒ・フォン・ミーゼス、さらに1974年にノーベル経済学賞を受賞したフリードリヒ・アウグスト・フォン・ハイエクといった人々が、オーストリア学派の経済学者として歴史に名を刻んでいる。

このようなウィーン大学を中心とした著名な学者たちの活躍もまた、19世紀末ウィーンという時代や場所と無関係ではないだろう。オーストリア学派の経済学をはじめ、このような学術研究の台頭と、その時代背景や場所、地域との関係について論じられているものは多くはない。ただ、八木紀一郎が、オーストリア学派の経済学の特徴を経済学史的にとらえるのに際して、ミーゼスの回想録をもとに、「その土壌たるオーストリア社会とその精神的動向への理解を欠かすわけにはいかない」（八木 1988: 245）と指摘している。しかしながら、同時に「オーストリア史の研究はドイツ

史の周辺に位置していて、参照しうる研究は僅かである」(八木 1988: 245) という状況にあることも指摘している。八木がこのように指摘した後も、オーストリアの歴史あるいは地域文化にかんする研究は多くないように思われる。ただ、オーストリアあるいはウィーンにおける音楽や美術などの芸術文化をめぐる特徴の中に、19世紀末ウィーンにおける社会意識や思想といった特徴が見いだせるのではないか。ひいては、ウィーンの学術研究を育んだものが、ウィーンにおける芸術文化を育んだ特徴の中に少なからず存在しているのではないか。このような視点から考える必要があるだろう。19世紀のウィーンでは、ハプスブルク家による支配が続いていたものの、経済活動や文化活動にかんしては自由な活動が黙認されていたという。そのぶん、オペラはもちろん、貴族たちを風刺するような民衆向けの喜劇としてのオペレッタや、そのオペレッタにも取り入れられるワルツやテンポの早いギャロップなどのダンス音楽など、民衆、市民の間に流行する音楽が広がっていた。極端な言い方になるが、市民による自由な文化活動や文化を享受する環境が存在していたのである。このようなウィーンの「空気感」は、音楽の世界のみならず様々な分野においても共有されていたと考えられる。

いずれにせよ、ウィーンは、「音楽の都」といわれるように音楽家にとどまることなく、学術研究に至るまで、唯一無二の人財を多数輩出している地域である。もちろん、他の地域や国でもそれぞれ世界的に有名な人財を輩出しているところは多いだろう。ただ、ウィーンという街に特有の文化そして「空気感」が、このような人財を多数輩出していることとどのように相関しているか、もちろん、因果関係が必ずしもあるとはいえないが、その関連性について、ジャンルを超えて考えてみる必要はあるのではないだろうか。それぞれのジャンルにおいて論じられてきたウィーンの歴史的、文化的特性を相互に見ることで、それぞれのジャンルにおける議論に新たな観点が見いだされるのではないかと考えられるのである。

### 3 ウィーンにおける歴史的・文化的資源の展示と著名人の顕彰

ところで、ウィーンの市街には、歴史やそれに基づく文化の痕跡が様々な形で残っている。特に、音楽の歴史や文化にまつわるものが数多く存在しているのはいうまでもない。代表的なものとしては、現在でも実際にオペラが上演されている国立歌劇場 (Staatsoper) やフォルクス・オーパー (Volksoper, 民衆, 大衆向けの歌劇場), ウィーンフィルハーモニー管弦楽団によるニューイヤークンサートが開かれることで有名なウィーン楽友協会 (Wiener Musikverein) のホールがある。

この他にも、ウィーンには音楽および音楽文化を紹介し展示する施設も数多く存在している。いわゆる音楽博物館と分類される施設である。音楽を「展示」するものは2つに分類されるといえる。まず、音楽の歴史や文化にまつわる物品を展示するものである。具体的には、楽器を古いものから順に分類、展示し、その歴史の変遷を提示するものである。ウィーンの場合、中心部にある王宮の中にある博物館に楽器のコレクションが展示さ



図1 王宮内にある楽器博物館 (著者撮影: 2010年9月)

れている。ただ、ここには、楽器のみならず蓄音機も展示されている。音楽にまつわる物質的なコレクションというと、楽器を中心に、音楽再生装置である蓄音機や自動演奏機械、電子オルガンやシンセサイザーなどのような電子楽器を展示し、歴史的な変遷を提示するものは数多い。これに加えて、地域に特有の民族楽器などを展示し、地理的な特徴を表現するものもまた数多い。

このような楽器を中心に音楽を展示した音楽博物館は、ウィーンに限らず多くの国に存在している<sup>2)</sup>。そのような中で、ウィーンには、楽器を展示している博物館とは別に、「音楽の家」(Haus Der Musik)と呼ばれる博物館がある。ここには、物理的な側面からみた音の原理と、そこから音楽に連なる理論的な展示をはじめ、ウィーンにまつわる音楽の歴史、具体的にはウィーンで活躍した作曲家たちにまつわる展示に加えて、ウィーンフィ



図2 音楽の家 ウィーンフィルハーモニー管弦楽団の展示  
(著者撮影：2015年2月)

- 2-1：主な指揮者たちの指揮棒 2-2：写真とともに掲示された歴史解説ボード  
2-3：ステージ衣装 2-4：メンバーの集合写真(1885年)  
2-5：カラヤンが指揮したときのプログラム 2-6：表彰盾など

ルハーモニー管弦楽団の歴史にまつわる展示があり、ウィーンの音楽文化全体をカバーする内容となっている。また、展示方法が工夫されており、体験的なことができる工夫がなされている展示もある。その点からも、「音楽の家」は、単に音楽の歴史を展示するだけではなく、ウィーンが音楽の街であることを象徴する音楽のテーマパークのような位置づけの博物館だといえる。

また、音楽博物館には、特定の音楽家を顕彰することを目的としたものがある。これは、主に音楽家の生家や住んでいた家を保存し改装するなどして設置されていることが多い。もちろん、このような博物館は、ウィーンに限らず、それぞれの音楽家の生誕地や実際の生家に設置されていることが多い。ウィーンの場合、著名な音楽家たちが生まれ育ったのに加え、他地域から移住してきた音楽家も多く、音楽家が暮らしていた家などが数多く現存している。その建物で、音楽家ゆかりの品を展示し、音楽家たちを顕彰するスタイルをとっている。ゆかりの品には、自筆の楽譜をはじめ、肖像画や衣服、装飾品や眼鏡などの身の回り品がある。たとえば、ベート



図3 音楽の家 作曲家の展示(著者撮影:2015年2月)

3-1: モーツァルト 3-2: ベートーヴェン 3-3: マラー 3-4: マラーの数学学習ノート

ウィーンおよびウィーンの著名人における観光資源としての顕彰・展示にかんする一考察

ーヴェンの場合、ドイツのボンにある生家は博物館 (Beethovens Geburtshaus) となっているが、ウィーン市内で住んでいた家も博物館として整備されている。ベートーヴェンの場合、ウィーン市内に複数の博物館があるが、展示品の多寡と種類の違いはあるものの、展示品の内容は、使用していた身の回り品や胸像、肖像画、楽譜など、類似したものになりがちである。もちろん、ウィーンには、ベートーヴェン以外にもハイドンが晩年暮らした家 (Haydnhaus) やモーツァルトがウィーンで暮らしていた家 (Mozarthaus Wien)、シューベルトの生家 (Schubert Geburtshaus) やシューベルト最期の家 (Schubert Sterbewohnung)、ヨハン・シュトラウス二世が暮らした家 (Johann Strauß Wohnung) が博物館として整備されているが、展示物は、やはり手書きの楽譜や肖像画、身の回り品、演奏会のポスターやプログラム、ピアノやヴァイオリンなどの楽器、胸像、デスマスクなど、その内容はほぼ共通している。



図4 ウィーンにあるベートーヴェンハウス (著者撮影: 2013年9月)

- 左: ベートーヴェンハウス (ハイリゲンシュタット)<sup>3)</sup>
- 右: パスカアラティハウス (ウィーン中心街, ウィーン大学本館向かい)<sup>4)</sup>
- 4-1: ベートーヴェンの巻毛・最期の部屋の取っ手と鍵、鍵穴蓋
- 4-2: 交響曲第2番のスケッチ
- 4-3: ハイリゲンシュタットの遺書
- 4-4: ベートーヴェンのデスマスク
- 4-5: ベートーヴェンが使用していたピアノ
- 4-6: 交響曲第5番のスケッチ
- 4-7: 交響曲第7番のスケッチ
- 4-8: 胸像 (フランツ・クレイン作, 1812)

このように音楽を展示する施設は数多くあるが、そもそも目に見えない音楽(演奏)そのものを目に見える形で展示することは不可能である。この点は、絵画や彫刻といった美術作品と大きく異なる。その結果、楽器や蓄音機といった演奏を媒介するものや、作曲家の自筆譜、使用していたピアノなどの楽器、身につけていた衣服や眼鏡、そして肖像画などが展示されることとなる。この場合、音楽を展示するというよりも、音楽家を顕彰する意味づけのほうが大きい。音楽家が住んでいた家の場合、音楽家の顕彰に加えて、そこに音楽家がたしかに居たという事実にも価値が見いだされるわけである。

音楽家にまつわる展示物は、当然のことながら本物であることが前提であり、見学する人々もそれに価値を見いだしている。ただ、実際には、たとえば自筆譜の場合、本物が貴重なものであることから、複製を展示していることが多い。しかしながら、たとえ複製であっても、その場に自筆譜があることによって、音楽家の存在が形になるのである。このような展示物を通して、音楽家や音楽作品の存在を、いわば「見える化」しているわけである。

音楽家を顕彰することを目的とした博物館の場合、「見える化」された展示物は、ヴァルター・ベンヤミン流に言えば、「アウラ」をまとったものだといえるだろう。訪れた人々は、音楽家が生活した場にいるという体験を通して、そして展示物を媒介にして「アウラ」を見いだそうとする。そのような「アウラ」をまとった場は、いわゆる「聖地」として表象され意味づけられる。

ここでいう「聖地」とは、神社や仏閣など、宗教や信仰の本拠地という本来の意味ではなく、歴史上の人物や著名人の出生地、企業の創業地、イベント発祥の地、近年では、映画やアニメなどの作品に登場する場所を意味する。特に、映画やアニメ作品の場合、作品に描かれる場所や物語の舞台は、ほとんどの場合、実在の場所に包含されている歴史や文化とは無関

係に設定されていることが多い。その結果、それまで意味を持たなかった場所が、突然「聖地」として意味づけられることになる。このような現象を踏まえて、「聖地」という概念を広くとらえ、観光資源として活用する事例が多くなっている。

ただ、このような「聖地」という概念は、以前から存在していたことはいうまでもない。ここで述べているウィーンの音楽文化を象徴する場である音楽家たちの家や音楽にかんする博物館、劇場などは、既に「聖地」としての意味づけがなされ、まさに観光資源として機能している。さらにいえば、ウィーンという街そのものが音楽の「聖地」として意味づけられ、観光資源となっている。

この「聖地」としての意味づけは、もちろん歴史的事実に基づいたものであるのだが、その事実を観光資源として活用しさらに資本にまで高めるには、行政による意味づけやそれに伴う経済活動の中での意味づけが必要である。翻ってみれば、観光資源としての「聖地」というのは、ある種意図的に意味づけられ価値づけられるものである。また、著名な人物の生家などといった「聖地」は、顕彰する目的のもとに整備されることによって観光資源となるといえるが、そのような整備がされていないところでも、「聖地」として実質的に観光地となり、場合によっては観光資源となることもある<sup>5)</sup>。

顕彰の意味を込められて建立された像や墓地なども、「聖地」となるだろう。ウィーンには、前述したような音楽家の生家などを博物館としたものの他に、市立公園 (Stadtspark) にはヨハン・シュトラウス二世などの像が建てられ観光スポットとなっている。市立公園内ではないが、市立公園の近くにベートーヴェンを顕彰した像が建立されているベートーヴェン広場があり、これもまた観光スポットとなっている。また、ウィーンを中心街から南東の外れにある中央墓地公園 (Zentralfriedhof) では、音楽家たちの墓地が敷地の一角にまとめて設置されている。実際に中央墓地公園に行つて

みると、墓地公園の一角に「MUSIKER」という立て看板が設置されており、観光スポットとして訪れる人が少なくないことがわかる。また、ウィーンの墓地を管理する公社(Friedhöfe Wien GmbH)のウェブページ(2021年9月1日取得、<https://www.friedhofewien.at/>)には、市内の墓地ごとに埋葬され



図5 ウィーン市立公園とその周辺にある作曲家の像(著者撮影:2010年9月)

5-1: シュトラウス二世 5-2: ブルックナー 5-3: シューベルト  
5-4: ベートーヴェン(市立公園近くのベートーヴェン広場)



図6 中央墓地公園にある作曲家達の墓(著者撮影:2015年2月)

6-1: 墓地公園内にある立て看板(「MUSIKER」とある) 6-2: 作曲家の区画にある案内図  
6-3: シュトラウス二世の墓 6-4: ベートーヴェンの墓 6-5: モーツァルトの墓  
6-6: シューベルトの墓

ウィーンおよびウィーンの著名人における観光資源としての顕彰・展示にかんする一考察

ている著名人のリストと場所を公開しており、前述した音楽家たちもリストに入っている。

前述した音楽家以外の人々についても、顕彰の象徴となるものは存在している。たとえば、ホフマンスタールは、その生家の場所にプレートが付けられている。美術にかんしてはクリムトが有名であるが、クリムトの顕彰というよりも、ウィーン分離派の作品を展示する場として分離派会館（セセッション）があり、「バートーヴェンフリース」など、クリムトの作品が展示されている。また、「聖地」という観点からすると、シェーンブルン宮殿の西に位置するクリムトのアトリエが、「クリムト・ヴィラ」として残され、季節限定で公開されている。

学術研究者の場合、ウィーン大学にゆかりのある人々が多いこともあって、ウィーン大学本館の中庭には多くの胸像やプレートが展示されている。これらの展示物を含め、ウィーン大学の本館自体は、基本的に自由に見学することができるようになっており、観光名所の一つとなっている。これに加えて、ウィーン大学では本館を巡る 60 分程度のガイドツアーも用意している<sup>6)</sup>。このように、胸像やプレートが設置されているウィーン大学もまた、広く公開されている「聖地」といえるだろう。この他に、ウィーン大学本館エントランスのホワイエには、ノーベル賞受賞者の顔写真を飾ったオブジェが展示されている。この中には、ハイエクの顔写真も飾られ



図7 ホフマンスタールの生家（著者撮影：2015年2月）



図8 ウィーン大学本館と中庭(著者撮影:2015年2月)

- 8-1: ウィーン大学本館 8-2: ウィーン大学エントランス脇にあるウィーン観光名所のサイン  
8-3: ウィーン大学本館中庭  
8-4~8-6: オーストリア学派経済学者のプレート(順にカール・メンガー, オイゲン・ベーム  
＝バヴェルク, フリードリッヒ・ヴィーザー)  
8-7: カール・ポパーの胸像 8-8: クリスチャン・ドップラーの胸像



図9 ウィーン大学本館エントランスにあるノーベル賞受賞者のオブジェと  
ハイエクの顔写真(著者撮影:2015年2月)

ている。

オーストリア学派の経済学者は、ウィーン大学で教鞭を執ったり学んだりしたものの、ウィーンおよびウィーン大学を離れて活躍した者が少なく

ない。これは、20世紀前半に勃発した2度の世界大戦を含めた歴史的な出来事が少なからず関係している。この点にかんしては、経済思想史研究の中で既に詳細に述べられているので、本稿で具体的に述べるまでもないだろう。たとえば、ハイエクはウィーンで生まれ育ち、ウィーン大学で学んだが、イギリス（ロンドン）、アメリカ（シカゴ）、ドイツ（フライブルグ）で活躍し、その後オーストリアではあるもののウィーンではなくザルツブルク大学で活躍した。したがって、ハイエクにゆかりのあるものはウィーンではなく、ザルツブルク大学などに所蔵されているという<sup>7)</sup>。また、オーストリア学派の創始者といえるメンガーの場合、メンガーが蒐集し使用していた約2万冊からなる書籍のコレクションは、東京商科大学、現在の一橋大学の社会科学古典資料センターに「メンガー文庫」として保存されている。メンガーが蒐集し使用していたゆかりの品はウィーンではなく日本にあり、一橋大学がメンガーの「聖地」であるといえるだろう。なお、一橋大学にメンガーの蔵書コレクションが渡った経緯については、岡崎(1981)やカンパニョロ(2002)などに詳しい。

このように、オーストリア学派の経済学者であるハイエクやメンガーにかんして、ウィーンには遺品などが保存、管理されている場所はないが、ウィーンに生まれ育ったハイエクにかんしては、生誕地にプレートが設置されている。森元孝によれば、ハイエクが生誕した場所はウィーンのエッセンハウザー通 (Messenhausergasse) 14番地であり(森 2006: 16)、この番地の建物の入口ドア横には、実際にプレートが設置されている<sup>8)</sup>。

ハイエクの生誕地にはこのようにプレートが設置されているが、このプレートは、たとえば音楽家の生家やホフマンスタールの生家、ウィーン大学本館にあるようなオーストリアの国旗である赤と白のリボンがかけられたウィーン観光名所のサイン<sup>9)</sup>「ウィーン—都市の紹介 (Wien-eine Stadt stellt sich vor)」になっていない。これは、ハイエクのプレートを設置したのが、ウィーンにあるフリードリヒ・ハイエク研究所 (Hayek Institut) であること



図10 ハイエクの生家(著者撮影:2015年2月)

- 10-1:ハイエクの生家の建物
- 10-2:建物にある通名のプレート
- 10-3:ハイエクの生家の入口(上部に14番地の表示,右に10-4のプレートがある)
- 10-4:ハイエク生誕の地のプレート

による。ハイエクのような学者の場合、一般的なレベルでの知名度は、音楽家や作家にはかなわないだろう。しかしながら、フリードリヒ・ハイエク研究所のような組織がハイエクを独自に顕彰することによって、専門家以外の人々にも顕彰されるべき人であることを発信していることには大きな意義があるだろう。日本でも、地方創生政策において観光資源となるように、地方出身の偉人や歴史的な事実などを掘り起こし、顕彰碑や展示施設を設置することは多い。ただ、その偉人の存在や歴史的な事実があったとしても、それらに対する意味や価値はどのようにして付与されるのかという問題があるだろう。具体的にいえば、観光資源にしようとする偉人や歴史などが、一般的にどの程度知られているのかという問題である。もちろん、広く知られていないから価値がないというものではない。その場合、広く知ってもらうための運動、すなわち顕彰をすることが重要なのは当然であろうし、碑や展示施設などを整備することはその一端である。その際、顕彰活動をどこが担うかという課題がある。多くの場合、公的な機関が政策的に実施していこう。ただ、顕彰される人物や事実は、地域によっ

て発見されるよりも、むしろ地域の外から発見されることが少なくない。

ハイエクの場合、ウィーン市のような行政ではなく、フリードリヒ・ハイエク研究所によって顕彰される対象として発見され、意味づけられたといえる。ハイエクは一般的には多く知られていない専門家であるかもしれないが、このように行政の外側から発見され価値付けられるものもあるだろう。直接的には一般的な観光資源としての価値を持たない、あるいはそのような整備がされていないものであっても、外から発見されることによって「聖地」が作られていくことは好ましいことであろう。ウィーンという街において、知名度は別にして、音楽家や美術家、作家など以外でも、このように顕彰されるに値する人物は多い。顕彰される分野が特定のものに偏るのではなく、顕彰される分野が広がることによって、その街や地域の様々な「顔」が見えてくることにもなる。ウィーンのような観光資源の多い街においても、このような様々な「顔」の連なりが見えることによって、ウィーンという街にある独特の文化的背景が浮かび上がり、その文化の魅力が、異なった多様な角度から再発見されるといえる。

#### 4 おわりに

本稿では、主にウィーンにおける市民の台頭の歴史的な軌跡を見ながら、音楽の街と呼ばれるウィーンにおいて、音楽などの芸術分野だけでなく、他の多様な分野においても世界的に活躍した顕彰されるべき人々がいることを確認した。そして、音楽などの芸術分野に垣間見られるウィーンやオーストリアの文化的な特徴が、学術研究など他の分野においても希有な存在となる人々を生み出す土壌となっているのではないかという仮説を提示した。この仮説については、おそらくそれぞれの分野で議論されていると思われる。ただ、それぞれの分野において議論されている思想的背景や歴史的背景に、相互に共通する特徴があるかということについては、あまり議論されていないと思われる。本稿ではこの点について考察するまでには

及ばないが、このような仮説を提示することで、ウィーンおよびオーストリアにかんする芸術文化や学術、思想研究における視点が充実するのではないかと考える次第である。

また、ウィーンにおける著名な人々の顕彰について代表的なものを挙げるとともに、一般的に知られている音楽家が顕彰されている「聖地」だけでなく、ウィーン大学に見られるような学術研究の「聖地」の状況を挙げた。「聖地」というのは、歴史的な蓄積やその重みによって作られていくものもあるが、映画やアニメ作品といったものにおける「聖地」にもみられるように、いわば草の根的に発見され意味づけられていくものもある。これは、歴史的な蓄積があるものでも同様なのではないだろうか。観光資源としての著名人の顕彰をめぐって、その資源としての価値付けをどのように考えるか。観光資源が資本としての経済価値を持つようになっている現在、観光学といった分野において研究されてきているが、このような問題については、地域を問わず主要なトピックとなっていくだろう。このトピックにかんして、既に歴史的な蓄積があるような対象についても再考する必要があるといえる。

### 補論——フリードリヒ・アウグスト・フォン・ハイエクの 墓地ガイド

フリードリヒ・アウグスト・フォン・ハイエクの墓地は、ウィーンの西側の郊外にあるノイシュティフト・アム・ヴァルデ墓地公園にある。著者は、2015年にハイエクの墓地を実際に訪れたことがある。森(2006)には、ハイエク生誕の地であるメッセンハウザー通の場所は地図で確認できるが、ハイエクの墓地の詳細な場所は書かれていなかった。ただ、「ウィーンの森が広がっていくその麓、一面の葡萄畑を見渡し、ホイリゲの立ち並ぶノイシュティフト・アム・ヴァルデの墓地に埋葬されている」(森 2006: 228)という記述があり、この記述をもとに、この墓地の位置と墓地の周辺情報

を収集した。Google Map に代表されるインターネット上の地図情報を用いれば、墓地の場所はもちろん、墓地までのルートや交通手段にかんする情報を得ることは容易である。ただ、具体的にどのような場所にあるのか、周りの様子はどうなっているのかがまとめられたものについて、著者は未見であった。もちろん、Google Map のストリートビューを使えば、そのようにまとめられたものがなくても問題ないだろう。ただ、著者が実際に行ってみると、Google Map で確認したイメージとはやや異なるように思われた。また、個人で公共交通機関を用いて行く方法を具体的に記録しておいたほうが、実際に行かれる人に対しては有益だろうと思われた。同時に、墓地公園の場所のみならず、墓地公園の中のどこにハイエクの墓地があるか、墓地の位置も提示しておいたほうがよいと思われた。そこで、ハイエクの墓地を訪れようとする人々への便宜として、墓地の場所であるノイシュティフト・アム・ヴァルデ墓地公園までのルートと、ハイエクの墓地の位置を記しておくことにする。

前述した森の「ホイリゲの立ち並ぶ……」という記述から、ノイシュティフト・アム・ヴァルデ地区の近隣でホイリゲが立ち並ぶ場所を探すと、墓地の北側にノイシュティフト・アム・ヴァルデというバス停があることがわかる。ウィーンの市街地からこのバス停に行くには、35A 番のバスに乗ることとなる。バス 35A 番は、国鉄ウィーン・シュピッテラウ駅 (Wien Spittelau Bahnhof)、あるいは地下鉄 4 号線 (U4) および 6 号線 (U6) のシュピッテラウ (Spittelau) 駅近くにあるシュピッテラウ S+U バス停 (始発) から乗車するか、同じく地下鉄 6 号線のヌスドルファー通 (Nußdorfer Straße) 駅前にあるヌスドルファー通 U バス停から乗車する。後者のほうがバス停の位置がわかりやすい。著者は、地下鉄 6 号線のウィーン西駅 (Westbahnhof) からヌスドルファー通駅に向かい、ヌスドルファー通 U バス停からバス 35A 番に乗車し、ノイシュティフト・アム・ヴァルデに向かった。

著者がノイシュティフト・アム・ヴァルデのバス停で降りると、たしか

にバス停の前にはホイリゲが立ち並んでおり、北に広がる山の斜面には、実際に葡萄畑が広がっている。立ち並ぶホイリゲを背に南側にある坂道を上り、閑静な住宅街を抜けると、ノイシュティフト・アム・ヴァルデ墓地公園に至る。ただ、このルートの場合、墓地に至る道は坂を上っていく地形になっていることから、疲労するルートとなっている。したがって、後述するルートでハイエクの墓地を訪れた後、坂を下るようにしてノイシュティフト・アム・ヴァルデのバス停を目指し、その後、このバス停の近くにあるホイリゲを訪れるのがルートとしてはよいだろう。

もう一つのルートは、ノイシュティフト・アム・ヴァルデ墓地公園の最寄りのバス停に向かう方法である。著者ははじめ地図上では気づかなかったが、この墓地の最寄りとなるバス停は、前述したノイシュティフト・アム・ヴァルデというバス停ではなく、墓地の入り口にある。著者は、前述

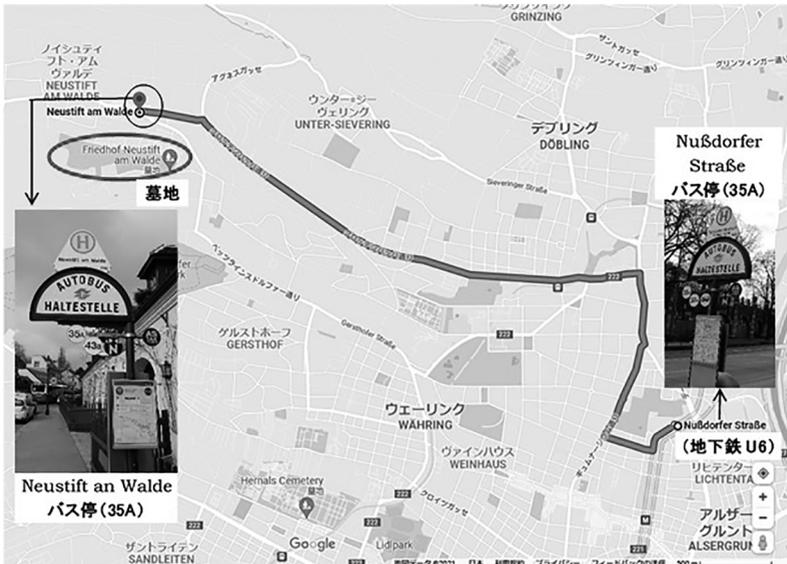


図11 ノイシュティフト・アム・ヴァルデバス停までのルート  
(図内の写真は著者撮影：2015年2月)

したノイシュティフト・アム・ヴァルデという名称と近くにホイリゲが立ち並ぶという情報から、前述したバス停を最寄りと思い込んでいた。その結果、墓地の入り口近くにあるバス停を地図上で確認できなかった（というよりしなかったというのが正しいだろう）。しかし、墓地のゲート近くにあるバス停を目指していくのが、墓地への最短ルートであることが地図上でもわかる。

墓地に最も近いバス停の名称は、ノイシュティフト墓地（霊園）(Neustifter Friedhof) といい、ゲート (Tor) 1 から 3 までである (3 が終点)。以下に示すハイエクの墓地に近いのは、ゲート 2 のバス停 (Neustifter Friedhof 2. Tor) である。このバス停にはバス 41A 番に乗車して向かう。バス 41A 番は、トラム 41 番の終点から接続している。バスの番号はトラムの番号と連動しているのでわかりやすいだろう。

トラム 41 番は、ウィーン大学本館の最寄り駅である地下鉄 2 号線 (U2) ショットェントアー (Schottentor) 駅が始発 (トラムの駅はショットェントアー U) である。トラム 41 番は、ウィーン市街の中心部から西に抜けていくルートをとる。トラム 41 番は、地下鉄 6 号線 (U6) のワーリンガー通—フォルクス・オーパー (Währinger Straße-Volksoper) 駅を通ることから、この駅から乗車するのも便利である。トラム 41 番で、終点のペッツラインズドルフ (Pötzleinsdorf) まで乗車し、接続されているバス 41A 番でノイシュティフト墓地バス停まで行くことになる。

さて、著者は、ホイリゲが連なるバス停から坂を上るようにしてノイシュティフト・アム・ヴァルデ墓地公園にやってきたのだが、墓地の入り口からすると反対側からアプローチしたことになり、まず墓地の敷地の入り口を探すのに戸惑った。後からわかったことだが、著者が足を踏み入れた入り口は、バス通りとは反対にある 4 番ゲートであった。

ノイシュティフト・アム・ヴァルデ墓地公園に足を踏み入れると、そこには木々に囲まれた薄暗い静寂な空間が広がっていた。想定していたより

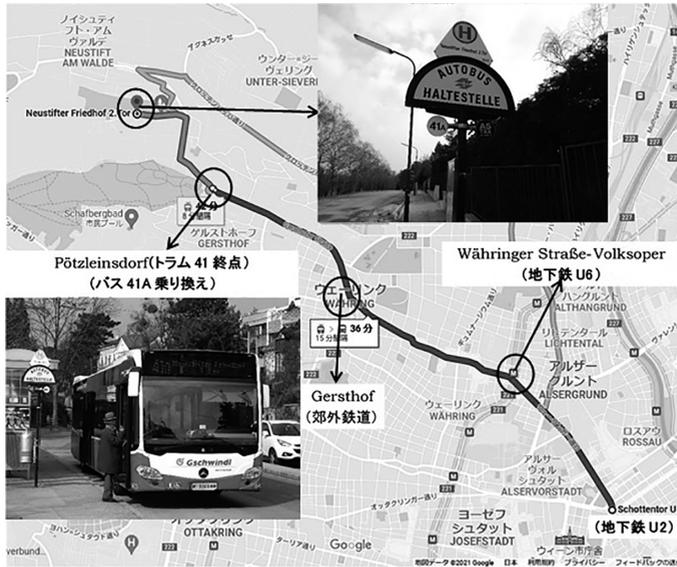


図12 ノイシュティフト墓地ゲート2バス停までのルート  
(図内の写真は著者撮影：2015年2月)



図13 ノイシュティフト・アム・ヴァルデ墓地公園周辺

もかなり広い墓地公園であり、この中からハイエクの墓地を探すのかと思うと、一瞬途方に暮れた。訪れたのは昼前であったが、薄暗い空間の中には、当然のことながら人が見当たらない。著者は、そもそもハイエクの墓地が墓地公園の中のどこにあるか手がかりを持っておらず、ウェブ上で見たハイエクの墓地の写真が唯一の手がかりであった。しかしながら、おそらくハイエクであれば、音楽家が埋葬されている中央墓地と同様、どこかに著名人の墓にかんする案内があるのではないかと、もしわからなければ、いわゆる墓堀職人（墓地の管理人）がどこかにいるだろうから尋ねればわかるだろう<sup>10</sup>、最悪の場合、ウェブ上で見た写真をもとにしらみつぶしに探せばいいだろうと思っていた。もっとも、音楽家と同様、著名な人々の区画が設置されていて、ハイエクの墓地もその区画にあるものだと楽観的に予想していたのだが、そのような様子はまったくなかった。

とりあえず墓地の案内板がないかを確認する。さすがにゲートの近くに案内板は設置されており、手がかりを得られそうだと安堵した。著者は、この案内板にたどり着く前、手がかりがなければ墓地を片っ端から探そうかとも考えていたから、案内板を発見したときは本当に安堵した。

案内板に何か手がかりがないか見てみると、墓地全体の配置図とともに、墓地に埋葬されている著名人のリストが掲示されていた。このリストにはきちんとハイエクの名前が掲載されており、これでハイエクの墓地の位置を把握することができた。なお、墓地の配置図と著名人のリストは、ウェブページにも掲載されている（2021年9月1日取得、<https://www.friedhofewie.n.at/friedhof-neustift>）。ここでは、ウェブページに掲載されている配置図とリストをもとに、ハイエクの墓地の位置を図で記しておく。ハイエクの墓地は墓地公園のグループ (Gruppe) 1・17 列 (Reihe)・11 番 (Nummer)にある（図14、15参照）。



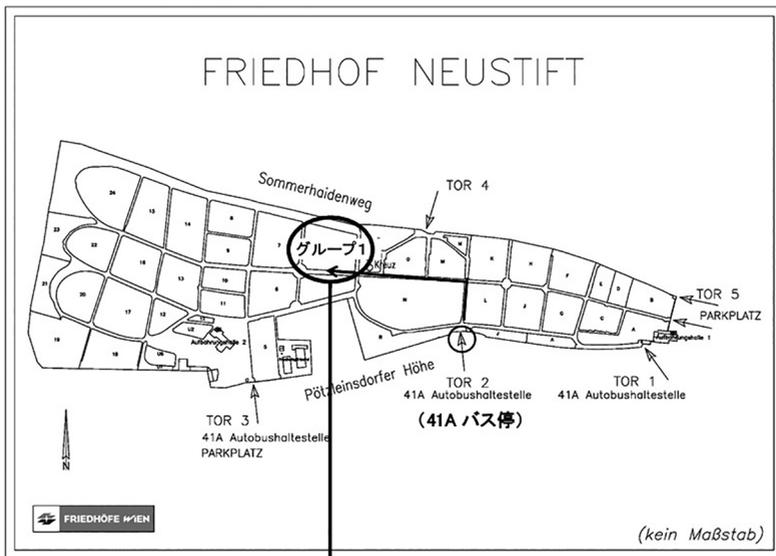
Ehrenhalber gewidmete Grabstellen  
im Friedhof NEUSTIFT

	Name des Geehrten	Beruf, Funktion	Geburtsdatum	Sterbedatum	Gruppe	Reihe	Nummer
1	BALSER Ewald, Prof.	Kammerschauspieler	05.10.1898	17.04.1978	E	1	1
2	BARWIG Franz, Prof.	Akademischer Bildhauer	19.04.1868	15.05.1931	G	2	8/9
3	DREGER Thomas Richard, von	Maler	02.10.1868	30.07.1948	N	7	79
4	ERÖD Ivan, Univ. Prof.	Komponist, Pianist	02.01.1936	24.06.2016	18	3	23
5	FICKERT Auguste	Lehrerin, Sozialreformerin	23.05.1855	09.06.1910	A	1	6
6	FORST Willi	Regisseur, Schauspieler	07.04.1903	11.08.1980	L	10	24
7	FRÄNKEL Karl	Maler, Graphiker	1895	08.11.1964	11	5	24
8	GAWELL Oskar, Prof.	Akademischer Maler	19.02.1888	14.03.1955	R	4	3
9	GERSTENBRAND Franz, Dr. Univ. Prof.	Neurologe	06.09.1924	30.06.2017	40		29
10	GOBERT Boy	Schauspieler, Theaterdirektor	05.06.1925	30.05.1986	22	6	1
11	HABERLER Franz, Dr.	Sektionschef (Verdienste um das Sanitätswesen)	18.01.1859	25.01.1928	B	HG	3
12	HÄRBER Paul, von Lucienfeld	Chemist	28.01.1863	20.12.1958	F	14	1
13	HAYEK Friedrich August, Univ. Prof. DDr.	Wirtschaftswissenschaftler, Sozialphilosoph	08.05.1899	23.03.1992	1	17	11
14	HOFF Hans, Univ. Prof. Dr.	Neurologe	11.12.1897	23.08.1969	C	4	1
15	HOLECEK Heinz	Opernsänger	13.04.1938	13.04.2012	1	10	7
16	IMRE Ibolya (RETHY Esther), Prof.	Kammersängerin	22.10.1912	28.01.2004	24	10	38
17	JEDLIČKA Ludwig, Univ. Prof. Dr.	Historiker	26.05.1916	29.04.1977	14	1	27
18	KAUER Wilhelm	Bildhauer, Dokumentarplastiker	27.11.1898	28.02.1976	G	8	23

Juli 2020

図14 墓地公園ゲート4とゲート近くの案内板にあるリスト  
(写真著者撮影：2015年2月，リスト：2021年9月1日取得，<https://www.friedhofewien.at/friedhof-neustift>，13番目にハイエクの墓地の位置が書いてある)

ウィーンおよびウィーンの著名人における観光資源としての顕彰・展示にかんする一考察



【グループ(Gruppe)1区画図】

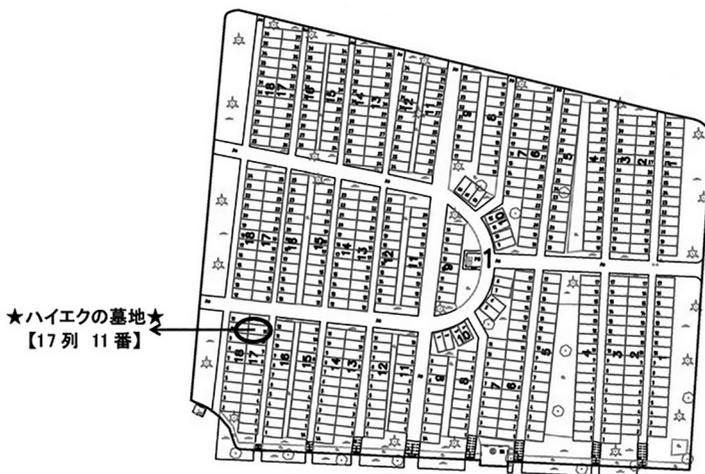


図 15 ハイエクの墓地の位置

(2021年9月1日取得, <https://www.friedhofewien.at/friedhof-neustift> に掲載の図から作成)



図16 ハイエクの墓地（著者撮影：2015年2月）

このように、案内板に掲示されているリストと配置図を見ながら、どうにかハイエクの墓地にたどり着いた。墓標自体は特別大きなものでもなく、とてもシンプルなものであった。シンプルな墓標ではあるが、ハイエクが眠っている場にいることで、まさに「聖地」を巡礼したという感慨を覚えた。

ハイエクをはじめとするオーストリア学派の経済学を研究している知り合いの研究者に尋ねると、意外にも「聖地」としてのウィーンに赴いたことがないということであった。たしかに、資料やアーカイブはウィーンにはないことから、赴く理由はないだろう。ただ、機会があれば赴いてみたいと話をする人は何人かいた。そのような人々に向けて、ここにハイエクの「聖地」としての墓地ガイドを記しておく。このガイドが誰かにとって何らかの役に立つことを期待したい。

**【注】**

- 1) この時代のウィーンにおける音楽文化は、現代では一般的にクラシック音楽と呼ばれる西洋古典芸術音楽として認識されている。ただ、ここでも述べた

ように、19世紀のウィーンにおいて市民に広がったオペラという音楽劇やワルツというダンス音楽は、流行しているという観点からも、流行の担い手が民衆だという観点からも、ポピュラー音楽そのものだとはいえる。ポピュラー音楽は、最新という意味での現代の流行音楽という認識をされているが、翻って、古典的な音楽であるクラシック音楽においても、ここで述べたような観点からポピュラー音楽とみなして、音楽文化を考えるという視点が必要だといえる。

- 2) 筆者が訪問したことのある音楽博物館にかんしていえば、パリ (Musée de la Musique)、ブリュッセル (Musée des Instruments de Musique、名称は楽器博物館)、浜松 (名称は浜松市楽器博物館) がある。これらは、主に西洋芸術音楽を基点とした展示を中心に歴史的な時系列に沿った展示と、民族楽器の展示がある。また、ヨーロッパにかんしていえば、ミュンヘンにあるドイツ博物館 (Deutsches Museum) は科学技術をテーマにしているが、その中に、ピアノやオルゴール、手回しオルガンなどの自動演奏機械や、電子楽器が展示されている。同じミュンヘンにあるミュンヘン市博物館 (Münchner Stadtmuseum) はミュンヘンの歴史などがテーマであるが、音楽にかんするコーナーでは、ピアノや弦楽器、管打楽器のみならずアジアの民族楽器 (日本も含む) まで、音楽に特化した博物館に匹敵するほど多くの種類の展示がある。もちろん、他の地域や国々にも、音楽文化を紹介する観点から、それぞれの地域や国に特有の楽器を展示したり、音楽や楽器に特化した博物館が設置されていたりすることは多い。
- 3) ハイリゲンシュタットのベートーヴェンハウスは、2017年に改装され、展示品の数が従前よりも増加したとのことである。
- 4) バスカラティとはこの建物の所有者の名前である。入り口の横のプレートに、「1804年から1815年まで、この家に2度住んでいた」とあり、さらに、「交響曲第4番、第5番、第7番、オペラ「フィデリオ」、レオノーレ序曲第3番、ピアノ協奏曲第4番、ヴァイオリン協奏曲、弦楽四重奏曲作品番号59番、95番など (を作曲した)」とある。
- 5) たとえば、ジョン・レノンが凶弾に倒れた彼の住まいでもあったダコタ・ハウスは、現在でも一般の人々が暮らす (高級) アパートメントであり、観光地として公開しているわけではない。しかし、実際には「聖地」として意味づけられ観光スポットとなっており、ダコタ・ハウスの前には観光客が写真を撮りに集まってくる。そのため観光客が敷地内に入らないように警備員が常駐し、門の傍らには「Authorized Persons Only Beyond This Point」という立て看板が掲げられている。ダコタ・ハウスは、このように公に観光地として

認証されているわけではないにもかかわらず、ガイドブックに掲載されるなど一般的な観光地として認識され、多くの人々が集まってくる。ちなみに、ダコタ・ハウスにはこのような「聖地」であることを象徴するモニュメントは存在しないが、ダコタ・ハウスの真向かいにあたるセントラルパークの一角に、ビートルズの楽曲から名前をとった「ストロベリー・フィールズ」という記念碑が設置されている。



図17 ダコタ・ハウスとストロベリー・フィールズ  
(著者撮影：2016年8月)

17-1~17-3：ダコタ・ハウス前（警備員がいる前で写真を撮る観光客）

17-4：ストロベリー・フィールズ

同様の例として、ビートルズに関連する例を挙げると、ロンドンにあるビートルズがレコーディングをしていたアビー・ロード・スタジオ (Abbey Road Studios) がある。アビー・ロード・スタジオは、非公開（ただし、2021年8月に創立90周年を記念し初めて限定公開された）であるし、敷地内にも立ち入ることはできないが、塀の壁には訪れた人々が書き込みをしており、それらが特に消されることなく残っている。加えて、スタジオ近くにある、ビートルズのアルバム『アビー・ロード』のジャケットの撮影場所である交差点の横断歩道には、ジャケットと同じ構図の写真を撮ろうと多くの観光客がやってくる。このような現状があるからか、2010年12月になってから、スタジオと横断歩道は、イギリス指定建造物 (Listed Buildings of United Kingdom) として認定されている（アビー・ロード・スタジオ：2021年9月1日取得，<https://historicengland.org.uk/listing/the-list/list-entry/1393688>，交差点：2021年9月1日取得，<https://historicengland.org.uk/listing/the-list/list-entry/>

ウィーンおよびウィーンの著名人における観光資源としての顕彰・展示にかんする一考察

ry/1396390)。また、2015年11月頃には、アビー・ロード・スタジオの隣に公式の土産物店が設置されている。



図 18 アビー・ロード・スタジオとアビー・ロード交差点  
(著者撮影：2015年11月)

18-1～18-2：アビー・ロード・スタジオ

(壁に落書きがある。ショップの案内が掲示されている)

18-3：アビー・ロード・ショップ入口

18-4：アビー・ロード交差点 (写真を撮ろうとする観光客が歩道に立って待っている)

もちろん、同様の事象は、映画やアニメ作品においても数多い。このように、「聖地」は、オーディエンスにあたる一般の人々が、歴史的事実や人物を媒介して意味づけられた結果として形成されていくものでもあり、権威や公的な機関によって「上から」意味づけられたものだけではないといえる。このようなことの延長線上に、映画やアニメ作品を媒介にした「聖地」の形成があるだろうし、翻って、「上から」意味づけられてきた観光資源や「聖地」もまた、ある種意図的に意味づけられた結果として存在しているとすれば、両者はあまり変わらないもののだといえる。

- 6) ガイドツアーの案内は、ウィーン大学のウェブページ (2021年9月1取得, <https://events.univie.ac.at/en/tours/guided-tours/guided-tours-of-the-main-building-of-the-university-of-vienna/>) を参照。
- 7) ハイエクの経済思想を研究する江頭進によれば、「ハイエクの遺品のうち、現在閲覧可能なものの多くは、スタンフォード大学フーバーインスティテュートと、ザルツブルク大学経済学部図書館に所蔵」されているという (2021年9月1日取得, <https://www.otaru-uc.ac.jp/~egashira/database/database.html>)。
- 8) なお、生誕地の他に、ハイエクがウィーンで過ごした場所などについては、

森(2006: 19)に場所と地図が掲載されており、実際に場所を確認することができる。

- 9) この観光名所のサインは、1956年のヴィナー・フェストヴォッフエン(Wiener Festwochen, 音楽祭)に際して設置されたものであった(2021年9月1日取得, [http://cityabc.at/index.php/Kategorie:Eine\\_Stadt\\_stellt\\_sich\\_vor](http://cityabc.at/index.php/Kategorie:Eine_Stadt_stellt_sich_vor))が、現在でもそのまま設置されており、観光名所のサインとして機能している。
- 10) 著者は、パリのパッシー墓地にある作曲家クロード・ドビュッシーの墓を訪ねたとき、墓の位置がどこにあるかを知らなかったのだが、そこには墓堀職人(墓地の管理人)がいて、彼らに尋ねたことでドビュッシーの墓にたどり着くことができた。

### 【参考文献】

- カンパニョロ・ジル(Campagnolo, Gilles)(山崎耕一訳), 2002, 「メンガー文庫——ある経済思想の原資料(La bibliothèque viennoise de Carl Menger conservée au Japon: étude des sources d'une pensée économique)」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』一橋大学社会科学古典資料センター, 22:23-39.
- 井上裕太, 2021, 『日本音楽博物館論』同成社.
- 小宮正安, 2000, 『ヨハン・シュトラウス——ワルツ王と落日のウィーン』中央公論新社.
- 小宮正安, 2001, 『オペラ楽園紀行』集英社.
- 森元孝, 2006, 『フリードリヒ・フォン・ハイエクのウィーン』新評論.
- 岡崎義富, 1981, 「カール・メンガー文庫覚書」『大学図書館研究』国公立大学図書館協力委員会大学図書館研究編集委員会, 18:7-13.
- 尾近浩幸・橋本努(編著), 2003, 『オーストリア学派の経済学——体系的序説』日本経済評論社.
- 八木紀一郎, 1988, 『オーストリア経済思想史研究——中欧帝国と経済学者』名古屋大学出版会.
- 山之内克子, 2019, 『物語オーストリアの歴史』中央公論新社.

### 【付記】

木下直也先生には、私が着任したときから、本学での先輩として様々な形でお世話になった。私が着任した頃、木下先生は基礎教育会議の主任をされていたが、「新人」である私にいろいろと気遣いをしていただき、とてもありがたかったことを記憶している。

木下先生は、グルメであり旅好きである(と私は認識している)ことから、後

者の旅に関連することと、木下先生の専門領域や関心に近いオーストリア、ウィーンに関連した論考を寄せようと考えていた。実際には、この分野の知識に乏しい私が付け焼き刃でオーストリア、ウィーンの世界史や思想について学び、さらにそれを旅と関連付けたテーマで「論じる」ことは難しく、「研究ノート」として問題提起をするにとどまってしまうが、長年お世話になった木下先生の記念号の末席に加えていただければと思い、本稿を寄せさせていただいた。本稿を掲載させていただいたことに記して感謝するとともに、本稿を通して木下先生への感謝の意を表すことができれば幸いである。なお、本稿は、成城大学特別研究助成（2016年度～2019年度）の成果の一部である。